

## クレインの『赤い武功章』について

厚 海 博 重

戦争を描いた代表的作品といえ、誰もがトルストイの『戦争と平和』を思い出すであろう。これは一般に歴史小説といわれているが、単なる歴史小説ではなく、ナポレオン戦争を経験する人間を通して、戦争とは何か、平和とは何かを訴えかけ、その中に人生論、戦争論を語りかけている。そして、歴史を変えていくのは特定の選ばれた人間ではなく、一人一人の人間であるという立場に立って、戦争を描いている。この『戦争と平和』のあとに続く作品はスティーヴン・クレインの『赤い武功章』であろうが、彼は『戦争と平和』を下敷にして、この作品を書いたといわれる。この『赤い武功章』において、クレインはトルストイとは違った目で戦争をみている。『戦争と平和』の500人以上の登場人物に対して、クレインは主人公のほかに、おもだった兵士を数人登場させているだけであるし、その中に戦争論は全く述べていない。一人の若者が戦争の恐怖の中で、知らぬうちに英雄になっていたという物語である。ナポレオン戦争は1796～1815年で、トルストイは1869年に『戦争と平和』を書き上げている。クレインの扱った戦争は1861～5年に渡るアメリカ南北戦争で、『赤い武功章』は1895年に出版された。両者共に、扱った戦争は経験していなかったもので、ある程度、戦争というものを客観視し得たといえよう。クレインはこの作品によって、現代戦争文学の先駆者となった。すぐれた心理分析によって、戦争における若者の行動を的確にとらえたのである。同じ南北戦争を描いたアンブローズ・ビアスは、この戦争を体験することによって、人生に虚無と矛盾を感じ、人間であることを自から嫌悪するなかから、ニヒリズムの漂よう、シニカルな、死にとりつかれた文学を生み出した。特に『いのち半ばに』の中で、死という人間の不可避な事実を、生と死の対照においてとらえ、クレイン、ヘミングウェイに影響を与えた。<sup>(1)</sup>

第一次世界大戦の時は戦争そのものに疑いの目を向け、戦争否定の立場に立った文学があらわれた。レマルクの『西部戦線異常なし』、ヘミングウェイの『武器よさらば』、ドス・パソスの『三人の兵士』、フォークナーの『兵士の報酬』、それにカロッサの『ルーマニア日記』等である。特に、ヘミングウェイとドス・パソスの書いた作品は、この大戦後にあらわれたアメリカの代表的戦争文学である。ヘミングウェイはビアスと同じく戦争に参加し、肉

体的にも、精神的にも大きな傷手を受けた。ビアスは人生の絶望にシニシズムで、ヘミングウェイはストイシズムで、対した。<sup>(2)</sup>ヘミングウェイの登場人物達は、瞬時に生命を燃焼させ、その後で、根なし草的存在の自分達を見い出して虚無感を味わっていたのである。ドス・パソスは『三人の兵士』によってヘミングウェイとは異質の文学をあらわした。すなわち、ドス・パソスの分身と思える登場人物、アンドリューズを軍隊機構に対立させ、そこに思想的・芸術的問題をからませていったのである。結局、アンドリューズは、最後には犠牲者となっていく。

第二次世界大戦は、人類を未曾有の混乱に落とし入れた。それを反映する文学があらわれる。ノーマン・メイラーの『裸者と死者』がそれであり、大岡昇平の『野火』とともに戦争文学の代表的作品である。メイラーは戦争文学の総決算ともいえるこの作品において、戦争における、個と個の対立、すなわち、インディヴィデュアリズムの衝突を描き出し、この戦争後から現代に生きる荒廃した精神の、救いのない孤独な人間像、悩める知識人の姿を、将軍カミングズが率いる軍隊機構の中でうごめく兵士、将校達に投影させて、戦後のアメリカの社会と政治の向かうところを予言したのである。<sup>(3)</sup>

ここまで、アメリカの戦争文学についておおまかに述べたが、次にその先駆的役割を果たした、スティーヴン・クレインについて論じてみたい。

「すぐれた作家といえば、私はヘンリー・ジェイムズ、スティーヴン・クレイン、マーク・トウェインをあげる。」<sup>(4)</sup>とヘミングウェイは言った。クレインは『街の女マギー』によってアメリカ文学のナチュラリズムの発端をなし、『赤い武功章』によって現代戦争文学の先駆けをなした。このクレインをヘミングウェイは現代アメリカ文学の先駆者とみなしたのである。ヘミングウェイがクレインの影響を受け、クレインとつながる作家であることはよく知られている。

クレインは1871年、ニュージャージー州に生まれ、29歳で夭折する。1871年はドライサーが生まれた年であり、クレインが死んだ1900年に処女作『シスター・キャリー』が出版された。このことはクレインが早熟な作家であった事を物語るものである。

クレインが生存していた当時のアメリカの社会的背景はいかなるものであったろうか。南北戦争の結果、アメリカはまがりなりにも分裂の危機を脱した。この戦争において、南部が主な戦場であり、敗北した事により致命的な打撃を受けたのに対して、北部は戦火を受ける事少なく、重工業を中心に、豊かな資源に恵まれた利を活かして、急激な発展をとげた。さらに、1869年、大陸横断鉄道の完成により、西部の開拓が進み、資源が開発され、市場が拡大された。アメリカはこうして、南北戦争以前は農業国であったが、この戦争を境にして工業国としてめざましい発展を遂げた。一方、この時代は、急速な発展のひずみがあったとこ

ろに生じてきた時代である。すべて金がものをいう時代、いわゆる『金ぴか時代』を反映して腐敗堕落した政治が行われ、北部隆盛の陰に、南部社会の崩壊があり、豊かな繁栄の恩恵を受ける者がある一方では、貧困にうちひしがれる者があった。クレインは『街の女マギー』によってこのような社会のひずみをとらえ得た作家であった。クレインはこの作品において、事実を冷徹に描きだした。そこには状況を判断する的確さ、正確さがある。文章には飾りがほとんどなく、センテンスも短く、簡潔な表現である。これはヘミングウェイに通じるものであった。

『街の女マギー』の主人公マギーは陰の薄い存在であり、最後の死の場面も、直接描かれずに、間接的に第三者を通じて、母親に報告される。クレインは主人公マギーの悲劇に主眼をおいたとともに、アメリカの繁栄の影に実在する社会のひずみ、ゆがみ、すなわち、スラム街にあって救いのない貧困を背負い込んだ者達の姿を、リアリスティックに描出しているのである。クレインは自己の感情を努めてこころして、冷静に、透徹した目でもってスラム街を写しだしたといえる。クレインは自分が体験したことのない世界をも豊かな想像力でふくらみをもたせることのできた作家であり、これを称して、『赤い武功章』の序文でストールマン (R. W. Stallman) が Crane is a master at creating illusions of reality by means of a fixed point of vision.<sup>(5)</sup> といったのである。すなわち、クレインは実際経験してしないが、想像力によって見事に現実性ある実体をつくりだすことのできた作家であった。そしてこのことを実証する作品が『赤い武功章』である。

『街の女マギー』は発刊当時売れ行きは芳しくなく、世間の評価も冷たいものだった。恐らく、クレインは次には人の注目する作品を書いてみせると意気込んだ事であろう。こうして一年おいて、1895年に『赤い武功章』を書き上げた。『街の女マギー』から一転して戦争という題材を扱ったのであるが、クレインがトルストイの『戦争と平和』を読んだ印象から南北戦争について書こうと考えた事は広く知られている。『赤い武功章』は一読して判るように、ピアスにはあまり見受けられなかった形の会話体を使用されている。一章の最初から “We're goin' t'move t'morra-sure,”<sup>(6)</sup> というある一人の背の高い兵士の言葉が目に飛び込む。以後はすべて生き生きとした会話体である。ピアスの短篇にはこのような会話体はそれほど見受けられない。このピアスと比較して、クレインはこうした自然な会話をとり入れる事によって兵士達を生き生きと行動させた。エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) が言ったように、ピアスは正規の教育を受けなかったことにコンプレックスを感じた結果、かたくるしい文体になり、方言、俗語を廃したのであるが、クレインにはそのようなコンプレックスはなく、次の時代の文学をすでに敏感に感じとっていた。<sup>(7)</sup> 『赤い武功章』の序文でストールマンが言ったように、クレインは言葉をあやつる技術を磨くことに全精力を集中

し、文体をつくりあげていくことに心血を注いだ。その序文中にヘンリー・ジェームズの言葉がある。“Hew out a style. It is by style we are saved.”<sup>(8)</sup> すなわち、文体をつくりあげていかねばならぬ。文体によってしか救われる道はないのだ、というこのヘンリー・ジェームズの決意は、クレイン自身の決意だった。

クレインはこうした決意のもとに『赤い武功章』を書いた。この題名“The Red Badge of Courage”という表現は、9章に初めて出てくる。

At times he regarded the wounded soldiers in an envious way. He conceived persons with torn bodies to be peculiarly happy. He wished that he, too, had a wound, a little red badge of courage.<sup>(9)</sup>

(時々彼は傷ついた兵士達を羨ましそうな目でながめた。身体に傷を負った者がとても幸福そうに思えた。彼は傷が欲しかった。小さくてもいいから、勇気を示す赤いしるしが欲しかった。)

普通の場合であったならば、戦場に出た者の心理として、傷は負いたくないと思うであろう。クレインは、ここで逆の心理をねらった。6章で、この若者（クレインは the youth と呼んでいる）は敵と味方の軍隊が攻防を繰り返している最中に、あまりの恐ろしさに逃げ出してしまう。その途中で傷ついた一行にであう。クレインのここでの描写は、ビアスの『チカモウガ』の中の重傷を負った者達の退却の場面を思い出させる。8章の後半で、この戦傷者の列の中の一人、ぼろを着た男（the tattered man）と話しをするのであるが、この男に“Where yeh hit?”（どこをやられたんだ。）と聞かれて、ぎくりとする。クレインはその後で次のように描く。

He turned away suddenly and slid through the crowd. His brow was heavily flushed, and his fingers were picking nervously at one of his buttons. He bent his head and fastened his eyes studiously upon the button as if it were a little problem. The tattered man looked after him in astonishment.<sup>(10)</sup>

(彼は突然、身をひるがえしてこの人ごみの中を走った。顔はひどくほてって、指で服のボタンを、どぎまぎしながらいじくりまわしていた。頭をたれて、ボタンの具合が悪いとでもいいだけに、一生懸命に目をボタンに向けていた。ぼろを着た男は、啞然として後姿

を見送った。)

若者の姿が目には浮んでくるようである。うしろめたく感じていた弱み（傷も負っていないのに脱走してこの負傷者の列に加わったこと）をこのぼろを着た男につかれて逃げ出したのである。それ故に、若者は先に述べた9章の引用が示すように、a little red badge of courage, 小さくてもいいから、赤い傷が欲しかったのであり、クレインは、この言葉を、この作品の題名にして、戦場の若者の心理を分析していくのである。

我々は、この若者が、その場、その場にあたって行動する時、何の不自然さも感じずに読み進むことができる。前にあげた二つの引用から察することができるように、そしてストーマンも指摘するように、想像力によって現実性ある実体をつくりだす能力のあったクレインは、心理描写にもすぐれた面を示している。ビアスであったならば、この題材をも10頁に満たない短篇に仕上げたであろうが、クレインは実にこまごまと神経を使って、若者の行動と心理状態を追っていく。12章で若者は偶然、思いがけなく、a red badge of courage を得る。逃亡中に味方の兵によって、ライフル銃で頭を強打される。この兵士も逃亡兵であり、捕えられるのではないかと勘違いしたのである。

Once he put his hand to the top of his head and timidly touched the wound. The scratching pain of the contact made him draw a long breath through his clinched teeth. His fingers were dabbled with blood.<sup>(11)</sup>

(彼は一度、頭のとっぺんに手をやって、恐る恐る傷口に触れてみた。やけつくような痛みで彼は歯をかみしめて、ふうーっと息をせずにはおれなかった。指が血でぬれた。)

若者はこうして立派な red badge of courage を得た。この後で通りかかった味方の兵士に助けられて連隊に戻った時はこの傷のおかげで一人前の兵士になっていた。

ビアスは死に異常な関心を示したが、クレインもまた、ヘミングウェイが指摘したように、死というものを作品の中に反映させている。『街の女マギー』のマギーの弟、トミーの死、そしてマギーの死、この死に対する母親のアイロニカルな結末の言葉、これはビアスと共通するものであった。『赤い武功章』においても9章で、若者は戦友ジム・コンクリンの死に直面する。この章の最後で彼は太陽を見るのであるが、“The red sun was pasted in the sky like a fierce wafer.”<sup>(12)</sup> (赤い太陽は人をおののかす聖餅のように空にはりつけられていた。)と感じる。この注には、“The repeated word fierce underscores the fact that Crane

intended the sun to personify the wrathful gods of Henry's insult and worship."<sup>13</sup>とあって、クレインは激怒した神の（これは若者ヘンリー・フレミングの屈辱と畏敬のあらわれであるが）擬人化として太陽を用いたのであるが、この fierce という言葉はそのことを強調するものである。この部分は主人公の死者に対する心の底の震えとおののきをあらわしているのかもしれない。またこの箇所をストールマンが序文でフランス印象派画家の絵に似ていると言ったのであろう。クレインはこの太陽を怒りのシンボルにしたのかもしれない。またジム・コンクリン (Jim Conklin) を Jesus Christ と解釈する批評家がいることをつけ加えておく。更に7章で若者が死体を見る場面がある。連隊から逃げ出し、夢中で走り、途中リスに出あい、リスの姿を見て自分自身も but an ordinary squirrel 単なるリスにすぎないと感じる。彼は木の枝が弓状を為して教会の礼拝堂のようにになっている場所にやってきた。何か宗教的雰囲気のあるところだったが、その入口近くのところで、ある物を見て恐怖に襲われる。円柱のような木に背をもたせかけて座っている死体が彼を見ていた。この場面を読むと、ビアスの『壮絶な一騎打ち』を思い出す。ビアスはこの短篇の主人公を死体と格闘させている。クレインの主人公は死体を見て恐怖に襲われるが、ビアスの主人公は、恐怖に加えて、夜の戦場の不気味な雰囲気の漂う森の中で、死体を、自分を襲う敵と見誤って格闘して死ぬのであるが、クレインとビアスの相違は、クレインが無理のない、自然ななりゆきの中に若者を行動させているのに対して、ビアスが登場人物を操り人形のように登場させ、ストーリーの驚きを与える展開に意を尽しているというところにある。

11章でクレインは次のように書いている。He thought that he wished he was dead. He believed that he envied a corpse.<sup>14</sup> 死ねばよかったと思い死人を羨んだ彼であったが red badge を得た若者の心理は今までとがらりと変る。This inward confidence evidently enabled him to be indifferent to little words of other men aimed at him. 内からくる自信で彼は自分に向けられた他の兵士達の言葉に無関心であることができた。逃亡中重傷を負った者達の一団にまぎれ込んだ時と比べると、この心理展開はあざやかである。クレインのアイロニカルな目が光っているのを感じる。16章では若者は他の兵士達を非難し、更に、軍隊の指揮官をも詰る。以前の若者とは似ても似つかぬのである。17章で Yesterday, when he had imagined the universe to be against him, he had hated it, little gods and big gods; today he hated the army of the foe with the same great hatred.<sup>15</sup> きのうは宇宙が、神々が彼に対立していて、彼はそれを憎んでいたが、今日は同じ憎しみを敵の軍勢に向けていた。そしてライフル銃を猛烈に敵軍にあびせていた。They now looked upon him as a war devil and he was now what he called a hero.<sup>16</sup> 一躍彼は war devil, hero となっていた。

クレインは『赤い武功章』を南北戦争を経験した者達の話の聞いて書いたと伝えられてい

る。それにしても戦闘場面の描写はゆきとどいている。更に、若者をとりまくもの、例えば、若者の目を通しての風景、特に太陽が重要な役割を果たしている。The red sun was pasted in the sky like a fierce wafer.<sup>(47)</sup>という何かを暗示している表現、そして最後の場面の太陽の光線も何かを予言しているかのような印象を与える。

クレインは異常な題材を扱った点、バイアスと相通じるものがある。スラム街、戦場等は人間の真の姿をみせてくれる格好の場であった。クレインはそこに生きる年頃の女を、血気盛んな若者を描いた。『街の女マギー』では、どうにもならぬ貧困を、そこに生きる人々の救いのない生活を、感傷を含まず冷徹に描き、『赤い武功章』においては、一人の若者を通して、誰の心にも存在するが、ほとんど誰も気付かぬ真の姿——真の姿というのは人の心の深底に潜む、あらゆる行動を導く衝動の源泉——を描いた。この作品が当時話題となったのは、若者が、一つの傷によって、思わぬ心理展開をみせ、読む者の心を妙に刺激したからである。クレインがつくり出す非現実の世界が、アイロニカルにも、現実性ある実体として、人々に受け入れられたからである。クレインのこの作品は人の心を写す鏡だったようである。

クレインの登場人物は北軍であろうと、南軍であろうと一向にさしつかえない。この点バイアスの登場人物と同じである。戦争の全体的展望、推移は一切関係ない。軍隊機構も描かれていない。戦争に対する政治的、社会的、哲学的考察もなされない。この点メイラー、ドス・パソスの戦争文学と大きな相違をみせている。クレインは戦場に英雄がいるとすればこんなものなのだよと言っている。英雄などというものは、ほんとうは存在しない。あの若者が受けた傷は実は最も不名誉なしるしなのだ。しかし、皮肉にも、その傷によって、若者は疎外感、不安感、恐怖感を克服してしまう。そして他の兵士達から hero と呼ばれる。

クレインは『赤い武功章』において、二人の最も矛盾する人間を一人の人間の中に住まわせ、実に見事な対照で描き出した。一人は逃走中の若い兵士であり、一人は戦場の英雄であった。この二人が一人の人間の中に生きているが、クレインは読者に何の不自然さも感じさせなかった。これに対してバイアスの登場人物は、大抵の場合、血の通った人間として我々にせまっては来なかった。その行動にはぎこちなさが目立ち、このような人間はこの世に存在するはずがないと感じさせた。しかし、クレインにあっては、登場人物を我々の目の前で行動させる。血が通った人間があらわれせまってくる。『赤い武功章』のこの若者はどこにもいるような人物である。ごく平凡な若者である。ホーソンの『緋文字』のヘスター・プリンヤ、メルヴィルの『白鯨』のエイハブ船長のような強烈な個性を有していない。しかし、クレインはアメリカ文学において、リアリズムの手法を用いてその先駆者となり、特に戦争文学に対して、一つの金字塔をうちたてた業績は高く評価できるのである。

## 注

- (1) cf. 自著「アンブローズ・ピアス『いのち半ばに』について」東洋女子短期大学紀要 No. 6
- (2) cf. 自著「ヘミングウェイの戦争小説について——瞬時の生命の燃焼——」東洋女子短期大学紀要 No. 13
- (3) cf. 自著「ノーマン・メイラーの『裸者と死者』について」東洋女子短期大学紀要 No. 4
- (4) *The Red Badge of Courage* (signet classics) Foreword p. ix.  
“The good writers,” said Hemingway, “are Henry James, Stephen Crane, and Mark Twain.”
- (5) *Ibid.*, p. vii (Foreword).
- (6) *Ibid.*, p. 11.
- (7) Edmond Wilson, *Patriotic Gore* (New York: Oxford University Press) P. 617~634.
- (8) *The Red Badge of Courage* p. vii (Foreword).
- (9) *Ibid.*, p. 59.
- (10) *Ibid.*, p. 59.
- (11) *Ibid.*, p. 75.
- (12) *Ibid.*, p. 64.
- (13) *Ibid.*, p. 211 (Footnotes).
- (14) *Ibid.*, p. 72.
- (15) *Ibid.*, p. 97~98.
- (16) *Ibid.*, p. 100.
- (17) *Ibid.*, p. 64.

## 参考文献

- R. W. Stallman and E. R. Hageman, *The War Dispatches of Stephen Crane* (New York University Press 1964)
- R. W. Stallman, *Stephen Crane* (George Braziller New York)
- Maurice Bassan, *Stephen Crane* (Printice-Hall, Inc)
- Ruth Franchere, *Stephen Crane* (Thomas Y. Crowell Company, New York)
- Richard M. Weatherford, *Stephen Crane* (Routledge & Kegan Paul, London and Boston)
- Fredson Bowers, *Stephen Crane, Tales of War* (The University Press of Virginia Charlottesville)